

◆俯瞰 MAIL 第 92 号◆

俯瞰工学研究所の松島克守のメールマガジンです。俯瞰メルマガ 92 号をお送りします。pdf 版はホームページに掲載し、facebook の俯瞰工学研究所のページにおいてもノートに掲載いたしますので、ご利用ください。

◆時候のご挨拶◆

8 月の初めの猛暑の日々、それに続く台風による愚図ついた天気、そして気がつけばもう夏も終わりそうです。田の稲はすでに穂をつけています。もう一月立てば秋分の日です。夜の方が長くなります。歳とともに時間の流れを早く感じます。

●壊れた G7

- ガタガタになったヨーロッパ
- 長期化必至の米中戦争
- 温暖化にどう向き合うか
- 俯瞰のクッキング “帝国ホテルのわざ”
- 俯瞰の書棚 “ザ・フォーミュラ”
- 雑感・私感

◆壊れた G7◆

世界に主要国の分断を強くアピールした G7 になってしまいました。首脳宣言無しで、二国間の合意を 1 枚の紙にまとめただけです。首脳間の合意は不可能と考えたマクロン大統領は、早々と首脳宣言を出さないことを決めて G7 にのぞみました。前回の G7 でもヨーロッパの首脳と厳しく対峙した後「シンゾウがいうなら俺も合意するよ」と言って首脳宣言に同意したトランプ大統領は、G7 後のカナダの首相の記者会見に腹を立て首脳宣言を破棄しました。今回も行く前から時間の無駄のような事を言っていましたから、今回の G7 も初めから壊れていました。

いろいろなことが意見交換されたと思いますが、肝心な気候温暖化対策やプラスチックの海洋汚染、世界貿易などの議論は表に出ず、誰でも合意できるアマゾン森林火災に対する懸念やイランの非核化が、世界に対する情報発信でした。

イランの非核化については、マクロン大統領の執念と予告なくイラン外相を G7 の地に招くという奇策が目立ちました。結果として「環境を整えばイランの大統領あってもいい」という事が実現すれば、大きな成果になるでしょう。しかし中東でドローン空爆を相互に繰り返す現状見ると、環境が整うということ自体、非常に難しいのではないのでしょうか。

さらに今回、イギリスのジョンソン首相という新たな「トランプ」が加わりましたから、G7そのものの存在意義が疑問視されてきました。次回の議長国のトランプ大統領は、開催を自分のファミリーのリゾートにやりたいと言い出して、すでにアメリカ国内で物議をかもししています。

このG7の状況にほくそ笑んでいるのは、ロシアと中国でしょう。欧米の弱体化は相対的に両国の存在感を高めます。この現下の国際情勢をみると、日本は日米同盟一本やりではなく、中国とロシアとの関係を丁寧に作り上げていく必要があります。問題はそこに朝鮮半島問題があることです。

トランプ大統領、来年のサミット会場に親族経営のリゾートを視野

<https://www.bloomberg.co.jp/news/articles/2019-08-26/PWUBN66VDKHU01>

◆ガタガタになったヨーロッパ◆

イギリスのトランプと言われる英国のジョンソン首相が、ドイツのメルケル首相とフランスのマクロン大統領に会いに行きました。むろんドイツもフランスも離脱案の見直しに応じないとしています。一方ジョンソン首相は、再交渉に行ったがEUが応じなかった、だから合意なき離脱が唯一の選択肢だと、議会と国民にいうために会談に入ったと思います。会談のあとの記者会見で、ズバリこの質問が記者からでした。

さすが老獪なメルケル首相だと思いました。離脱の見直しをその場で拒絶するのではなく、30日間の猶予あげるから宿題の答えを持ってきなさい、です。メルケル首相は、合意なき離脱にEUは準備しているとも付け加えました。なぜか、これにジョンソン首相は喜んでいたように見えました。EUがどうしても譲れないバックストップ条項は、英国議会も絶対に譲れないものです。このやりとりをジョンソン首相はどう使うのでしょうか。

フランスのマクロン大統領も、メイ首相とまとめた離脱案は見直さないといいながらも30日間の時間については肯定的で、メルケル首相とのアウンの呼吸を感じます。両者とも本物の政治家ですね。合意なき離脱になると大勢の人は思っています。

しかしアイルランド国境問題は、離脱なき合意の最大の混乱になることは必至です。なにしろ、長年続いたカソリックとプロテスタントの戦闘の和平で認められた国境の自由ですから、ここにハードの国境施設を設ける事は大問題なります。テロや武闘のリスクすら論じられています。

そのドイツですが、ついにマイナス成長に陥りました。ヨーロッパ経済の屋台骨ですから、EU全体の経済の後退を意味します。無論、離脱後のイギリス経済はマイナスになります。ドイツ経済の不振の原因は、米中の貿易戦争による各地域の経済の後退です。GDPにおける輸出割合の高いドイツは、かなりの影響を受けています。したがってドイツは、マイナス成長になったのでしょうか。

米中の貿易戦争による負の影響は、日本においても出ています。急成長の中国を前提とした企業活動は、大きな影響を受けています。自動車関係、工作機械、ロボットなどは大打撃です。

イタリアの連立政権は崩壊しました。もともと無理な連立政権でしたが、やはり極右の力が強く、政権の枠組みを維持できませんでした。極右は、総選挙に持ち込んで政権を奪取する勢いです。

スペインも、4月の総選挙の後、政権が成立できません。場合によっては11月に再選挙ということですが。

要するに、陰りが見えたドイツのリーダーシップ、イタリアやスペインの政権不在、そしてイギリスのEU離脱と、ヨーロッパ全体がガタガタになった感じですが、ここに忍び寄るのが中国でしょう。すでにイタリアとギリシアは、中国を受け入れています。地政学的には、ロシアにもヨーロッパの弱体は有意に働きます。加えてアメリカとEUは、ほとんど断絶状態です。私は何度も書いていますが、アメリカ、ロシア、中国が覇権を争う現在の世界において、EUこそが平和のバランスを取る力としますので、その弱体は気になります。改めて現在の世界は、アメリカ、中国、ロシアという3G世界で、そしてアメリカと中露の冷戦構造にあることを認識するしかありません。

名目GDPで世界11位、軍事予算は日本に次ぐ7位というロシアの存在感は、核保有国という力でしょうか。北朝鮮もこのモデルを見ているのでしょうか。日本はロシアより軍事予算が多いとすると、どこにお金を使っているのでしょうか。割高な調達をしているのでしょうか。核兵器とミサイルが効率的な軍備なのでしょうか。

メルケル氏、ブレグジット国境問題の代替案「30日以内に可能」 英首相に

<https://www.bbc.com/japanese/49430097>

フランス、英国の合意なきEU離脱が最もあり得るシナリオに

<https://www.bloomberg.co.jp/news/articles/2019-08-21/PWLDRUSYF01S01>

ブレグジットを大きく揺るがす「アイルランド国境問題」とは何か

<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/58265>

西ベルファストの平行線：確執の都市風景

<http://www.meijigakuin.ac.jp/~gill/pdf/belfast.pdf>

ドイツ経済、マイナス成長継続の可能性＝連銀

<https://jp.reuters.com/article/germany-economy-bundesbank-idJPKCN1V90VZ>

イタリア首相が辞意表明、連立崩壊 同盟党首を強く非難

<https://jp.reuters.com/article/italy-politics-conte-salvini-idJPKCN1VA1K3>

スペイン政局、混乱続く＝連立交渉失敗なら再選挙

<https://www.ijji.com/jc/article?k=2019072600713&g=int>

◆長期化必至の米中貿易戦争◆

アメリカと中国の関税引き上げの応酬が止まりません。トランプ大統領の関税引き上げ第4弾に対して、中国が対抗して関税引き上げを発表すれば、さらにそれに対して関税引き上げを発表し、まさに泥沼化しています。

これに対して、さすがにアメリカの産業界もとんでもないと反論しています。トランプ大統領はチキンレースを楽しんでいるかに見えますが、すでに米国の国民は関税を支払っています。それでなくても景気後退の兆候が見られるアメリカ経済ですから、貿易戦争で産業界は投資を控え、人員削減さえ行おうとしています。何を追求しているのか、ただ自分の支持層に対するアピールだけで、全く国益を考えない、とんでもない大統領です。仕方なくアメリカの中央銀行も利下げのメッセージを市場に送りましたが、それでアメリカ経済の後退を止める事はできないでしょう。

このアメリカと中国の貿易戦争は、ヨーロッパをはじめ日本経済、韓国経済の減速を引き起こしています。ヨーロッパ最強のドイツ経済もマイナス成長に転じました。市場も長期化するという判断で、株式市場は大幅に下げています。

やっかいなことに、単なる貿易摩擦ではなく、いくつかの難しい問題とリンクされてしまいました。まずファーウェイ問題です。さすがにカナダで逮捕されているファーウェイ副会長の件は、司法の問題ですから繋がりませんが、米商務省はファーウェイ関連46社を新たな輸出管理対象にすると発表しました。ファーウェイに対する制裁は、ファーウェイに大きなインパクトを与えつつあります。

ファーウェイの CEO は、社内文書で存亡の危機と、社員に一致団結してこの難局を乗り越えようと呼びかけています。必死で独自の技術を開発することになります。そう簡単に技術は開発できません。しかしファーウェイの社員は、火事場の馬鹿力で結果を出すでしょう。今でも 996 体制という猛烈社員たちですから。即ち 9 時入社、9 時退社、週 6 日。

トランプ大統領が、安全保障上の問題としてファーウェイの制裁を持ち出していますが、あながちこれは否定できません。制裁を破ってイランやシリアに輸出している事は事実です。ファーウェイ副会長もイランにオフィスがあることを認めています。アメリカは、かなりの証拠を握っているでしょう。アメリカは簡単には妥協できません。

台湾問題も貿易戦争に絡んで来ました。中国の強い反対を押しきって台湾に最新の戦闘機を輸出することを決めました。すでに大量の戦車も輸出済みです。中国は 1 つの中国という立場ですから、激しく非難しています。アメリカから見れば、東アジア、西太平洋、南シナ海に勢力を広げる中国に対する対抗戦略ですので、これも譲れません。

加えて最近、香港の騒乱がアメリカと中国の論争の場になっています。中国の武力行使を、天安門事件を引き合いに出して牽制していますが、これも中国から見れば 1 国 2 制度という中国の国内問題で、アメリカの言動は内政干渉であると激しく反発しています。

これだけ絡まってくると、双方が歩み寄って貿易戦争を終結させる事は極めて難しくなります。かつて、アメリカから激しく叩かれた当時の対米依存の日本と違い、今や世界第二の経済大国ですし、ラオス、カンボジア、ミャンマーにベトナムを加えた中国の経済圏ができつつあります。一帯一路の戦略によって、ヨーロッパにも中国経済は広がりつつあります。すでにギリシア、イタリアは中国を積極的に受け入れる方向になっていますし、ドイツ経済をはじめとして EU も中国の市場に大きく依存しています。英国にとっても、中国市場は EU 離脱後もアメリカに次ぐ重要な市場です。ですから、中国は経済成長を少し我慢すれば、長期戦に耐えることができるでしょう。無論、過去の無理な急成長のツケが国内金融市場にあるようですので、それが弾けなければ。

アメリカの敵は中国、ロシア、イランです。なので、中国に対する甘い対応は、国民や議会に見せられません。アメリカも世界一の国内市場がありますから、ある程度の耐久力があります。アメリカの産業界が表立ってトランプ再選に反対するようなことがなければ、現状が続くのではないのでしょうか。

日米間の貿易交渉は、妥結したようです。農業で TPP と同じ線まで譲歩し、とりあえず日本の要求の自動車追加関税については保留にするという、トランプ大統領に忖度する内容で手打ちしたようです。加えて、中国に輸出できない大豆の在庫を買ってあげるとまでサービスしました。トランプ大統領は「農業で日本から譲歩を引き出し、自動車は守った」と選挙民に言えます。なかなか大人の交渉でしたね。もともと日本の農業は過保護で関税が高すぎますから、これで国民は肉や乳製品が安く手に入るようになります。

トランプ氏が対中関税引き上げ、報復に対抗 米企業に中国撤退も

<https://jp.reuters.com/article/usa-trade-china-trump-tariff-idJPKCN1VD2IM>

トランプ氏、9月からまた中国に追加関税とツイッターで発表 貿易戦争悪化へ

<https://www.bbc.com/japanese/49201932>

米中貿易戦争で敗れるのは誰か

<https://www.bbc.com/japanese/features-and-analysis-48281312>

米商務省、ファーウェイ関連 46 社を新たな輸出管理対象に

<https://www.jetro.go.jp/biznews/2019/08/32afce8b66f96797.html>

ファーウェイ禁輸また猶予 米商務省

<https://www.sankei.com/world/news/190817/wor1908170018-n1.html>

米国務長官、ファーウェイ副会長「交渉材料とせず」

<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO48899050T20C19A8000000/>

ファーウェイ C F O、イランオフィスの存在認める

<https://www.bloomberg.co.jp/news/articles/2019-08-21/PWL95Y6VDKHS01>

ファーウェイ「存亡の機」 社内文書で任 C E O

<https://www.sankei.com/world/news/190821/wor1908210027-n1.html>

トランプ大統領 香港抗議活動で「第二の天安門」の懸念を表明

<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20190819/k10012040281000.html>

アメリカ、台湾に F16 戦闘機を売却へ 中国は猛反発

https://www.huffingtonpost.jp/entry/taiwan-f16-america_jp_5d58be3ce4b0d8840ff4426f

◆温暖化にどう向き合うか◆

アマゾンで大規模な森林火災が発生していて、世界中の関心を集めています。マクロン大統領の「我が家が燃えている」という叫びは心に響きます。G7でも取り上げられました。ブラジル大統領は、おせっかいだ、国内問題だ、NGOが火をつけているとめちやくちやの発言です。まさにブラジルのトランプそのものです。トランプ大統領は、

1つの大統領のモデルを作ってしまったようです。怖いのは、結構国民が支持していることです。

なにしろ地球の20%の酸素を作っているというアマゾンの森林ですから、人類の危機です。海岸のサンパウロは煙に覆われて、昼間が夜になっている映像は衝撃的です。近くの住民にとっては生死に関わる問題です。

これほどの規模ではありませんが、北極圏でも大規模な森林火災が相次いでいます。この北極圏の森林火災の排出する二酸化炭素は、スウェーデン1国分だということですから、その規模の大きさが推し量られます。フランスや南ヨーロッパでも森林火災が多数発生しています。

これらはすべて熱波、猛暑、乾燥による自然発火ということですので、急激に進む地球温暖化の危機的な状況を、我々は改めて再認識して行動を起こさないといけないでしょう。自然が人類に警鐘を発していると受け止めたいです。まさにG7で取り上げるべきテーマですが、トランプ大統領は多分、これをよしとしないでしょう。就任後、真っ先にパリ協定を離脱した人ですから。それを見越してマクロン大統領は今回のG7では首脳宣言出さないと早々と宣言しました。

トランプ大統領も米国における豪雨による洪水、竜巻、暴風雨、そして冬の大雪を目の当たりにしていますから、気象温暖化が喫緊課題であることは承知しているでしょうが、選挙公約と関連する支持層に対するディコミットは出来ないということでしょう。

カルフォルニア州などは、連邦政府が緩和した自動車の排ガス規制を州独自に厳しくしています。カルフォルニア州は、二酸化炭素の排出についても規制を強めています。カルフォルニア州の山火事も凄いですから。

翻ってみると、日本の環境対策は進んでいるのでしょうか。水素社会を作るというような産業振興には経済産業省は熱心ですが、企業活動に負担となる環境政策にはあまり関心がないようです。スウェーデンやフランスのような、ヨーロッパの先進国が既に取り入れているカーボンプライシングについても、及び腰です。環境省のこれに関する委員会も結論を出していません。

消費税の次の財源として、炭素税が検討されているとのことですが、環境に対する意識レベルが低いことが気になります。しかし、実現すれば温暖化対策にもなります。世の中の資本の流れがESG投資に流れている時代に、経団連企業の意識の古さにはうん

ざりします。ESG 投資という環境の中で、企業価値を出していくことが経営者の使命だという意識がないようです。それに寄り添う経済産業省という、言い過ぎでしょうか。

北極圏で森林火災相次ぐ 国連「前代未聞の事態」

<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20190729/k10012012211000.html>

ブラジルのアマゾン熱帯雨林で火災が急増、国際社会が懸念

<https://jp.reuters.com/article/brazil-amazon-wildfire-idJPKCN1VD0CB>

カーボンプライシング 政府は導入の可否を決断せよ

<https://www.nikkan.co.jp/articles/view/00528351>

◆俯瞰のクッキング “帝国ホテルのわざ” ◆

NHKの「今日の料理」で、オリンピック村の食事について特集がありました。前回のオリンピックでは、全国から何百人もの料理人を集めました。当時はまだ西洋料理があまり普及していませんでした。リーダーになった当時の帝国ホテルの総料理長の村上信夫さんが、門外不出の帝国ホテルのソースのレシピを公開し、それを見て集められた者たちは料理を作ったとのこと。英断です。今回もオリンピックの料理に関しても元帝国ホテルの総料理長の田中健一郎さんがリーダーになって進めるようです。

そうした、かつての料理人を各地に尋ねてインタビューするセクションの終わりに、2つ3つ料理の紹介がありました。差し障りがあるかもしれませんが、いわゆる料理研究家と元帝国ホテルの総料理長の田中健一郎さんには、アマチュアとプロフェッショナルの違いを感じました。話すこと、包丁さばきなどの所作に違いを感じました。

その一つがインドネシア料理のナシゴレンでした。乱暴に言えば、インドネシア風ドライカレーでしょうか。語り口と手元の所作に惹かれて作ってみました。レシピはネットにあります。まずバターライスを炊きました。ずっと昔、まだピラフがそれほど一般的でない時、まずバターライスを作り、具を炒めた後にバターライス入れて、軽く炒めるといふピラフの料理法でした。何十年ぶりにバターライスを炊きました。懐かしい昔の思い出がよみがえって来ました。

材料はピーマン、マッシュルーム、牛肉、むきエビ、ニンニクです。まず鍋にサラダオイルを入れてニンニクのみじん切りを炒め、香りが立ったらマッシュルームを入れて炒めて味を出し、ピーマンを入れてさっと炒めます。これを取り出して、同じフライパンで牛肉を炒めます。そして海老も加え、色が変わったら火を止めて、ナンプラーとカ

レー粉と塩で味付けをし、炒めておいたマッシュルームとピーマンを加えて、バターライス入れてさっと炒めます。

ここで印象に残ったのは、ピーマン、牛肉、マッシュルームも、すべて1センチ角の大きさに揃えることです。以前フランス料理を習いに行った時、「高級レストランではタマネギのみじん切りは一つ一つ切って大きさを揃える」と聞きましたが、まさに目の前で見ることができました。この辺が料理研究家と違います。火を止めてからカレー粉や調味料入れるという手順で香りを残すという技です。レシピではポーチドエッグを載せますが、ポーチドエッグを手際よく作る技が見事でした。手元は本当に淡々と静かな所作です。

作って食べましたが、おいしかったです。バターライスも簡単にできます。我が家の定番となって時々作っています。

もう一つの料理は、野菜炒めの上に鳥のモモ肉のソテーを載せる料理でした。野菜はピーマン、ズッキーニ、タマネギ、トマト、ニンニクです。これもみじん切りのニンニク以外のすべての野菜は2センチ角に切りそろえます。同じ大きさに切りそろえる。これがプロの技でした。野菜を炒めた後に、湯むきしたトマトを入れて少し煮込んで塩こしょうで味付けです。トマトの種は取りませんでした。トリのモモ肉もゆっくりと、かなりきちっと焦げ目をつけていました。フライパンに入れた後、あまりいじらない、これも大切です。

この世界とは全く違う世界の料理ですが、ネットで「ナスの蒲焼き風」という料理が紹介されていたので作ってみるとこれが結構おいしいです。レシピは簡単でナスを1センチくらいに薄切りにしてフライパンで、油で焼きます。ナスが焼けたら酒と醤油とみりんのタレをフライパンに入れて絡ませるだけです。ぶりの照り焼きに近いです。粉山椒を降って食べましたが美味しかったです。これも我が家の定番になりつつあります。

ナシゴレン

<https://www.osarai-kitchen.com/nhk/nhk%E3%81%8D%E3%82%87%E3%81%86%E3%81%AE%E6%96%99%E7%90%86/%E3%83%8A%E3%82%B7%E3%82%B4%E3%83%AC%E3%83%B3-3/>

鶏肉と夏野菜のオリエンタル風

<https://www.osarai-kitchen.com/nhk/nhk%E3%81%8d%E3%82%87%E3%81%86%E3%81%AE%E6%96%99%E7%90%86/%E9%B6%8F%E8%82%89%E3%81%A8%E5%A4%8F%E9%87%8E%E8%8F%9C%E3%81%AE%E3%82%AA%E3%83%AA%E3%82%A8%E3%83%B3%E3%82%BF%E3%83%AB%E9%A2%A8/>

◆俯瞰の書棚 “ザ・フォーミュラ” ◆

今回は「ザ・フォーミュラ～科学が解き明かした成功の普遍的法則」アルバート＝ラズロ・バラバシ、光文社 2019 です。

著者のバラバシは、ダンカン・ワッツとネットワークを科学として確立した、ノーベル賞級の理論物理学の研究者です。

ダンカン・ワッツはスモール・ワールド現象をネットワーク理論として証明しました。スモール・ワールド現象とは、知り合い関係を芋づる式に辿っていけば、比較的簡単に世界中の誰にでも行き着くという仮説です。あえて日本語にすれば「広いようで世間は狭い」という現象です。

バラバシは、WEBのネットワーク分析を通じて、インターネット世界は一部のノードが膨大なリンクを持つ一方で、ほとんどはごくわずかなノードとしか繋がっていないようなネットワーク構造を持つ、スケールフリーネットワークであることを見つけました。

この研究成果は、「新ネットワーク思考」（青木薫訳 NHK 出版 2002年）としてすぐに出版され、松島研究室では読んで勉強しました。そしてこのネットワーク分析の技術を使って、たくさんの研究をしました。

そのバラバシは、ネットワーク分析に目途をつけた後、「成功の科学」という研究を始めたわけですが、よくある主観的、独断的な成功法則や事例を列挙した成功本とは一線を画し、彼は理論物理学者ですから、科学として「成功」を研究しようとする野心的な試みです。

まず成功とは何か？ですが、“本書において、私たちは成功を次のように定義した。成功とは、あなたが属する社会から受け取る報酬である”と言明しています。また“成功と名声とはまったく別ものなのだ”とも言っています。異論がある人もいますが、明快です。

そして一番重要なことは、“成功とは「個人的なものではなく集団的なものであり、あなたが属する社会の反応を必要とする”です。私は研究室のOB会でいつも、「才能で人生を開けない、関係性である」と言ってきましたが、まさにこれです。

そして膨大な学術論文のネットワーク分析を行い、“データを分析するうち、私たちはすぐに一定のパターンを見つけ出し、その「公式」を使って、自分たちや同僚あるいはライバルの「未来の研究成果」を予測できるようになった。あまりにも普遍的なそのパターンを、私たちは「成功の法則」と呼び始めた。ビッグデータが登場して「成功の科学」が発見されるまで、成功に重要なのは、運か努力か才能か、はたまたその3つの秘密の比率の組み合わせだと、大勢の人は思い込んでいた”とあります。

研究成果を予測するという技術を確立して、過去のノーベル賞の受賞者がほぼ初期の研究段階から予測できたことが書かれています。1つだけ外れたケースが見つかりました。“私たちによる最も残念な発見は？ なぜか2008年のノーベル化学賞の選考から漏れた男性が、アラバマ州にあるトヨタの販売店で送迎バンの運転手をしていたことだった”と悲劇的です。

本書に書かれている成功の法則は下記です。

- 成功の第一の法則
パフォーマンスが成功を促す。パフォーマンスが測定できない時にはネットワークが成功を促す。
- 成功の第二の法則
パフォーマンスには上限があるが、成功には上限はない
- 成功の第三の法則
 $過去の成功 \times 適応度 = 将来の成功$
- 成功の第四の法則
チームの成功にはバランスと多様性が不可欠だが、功績を認められるのは、ひとりだけだ。
- 成功の第五の法則
不屈の精神があれば、成功はいつでもやってくる。

スポーツのようにパフォーマンスが数値化されている場合は、成功はそれで決まることをテニスやアメフトのデータで証明していますが、パフォーマンスが数値化できないアーティストについての分析が興味深いです。

“分析の結果、絵画が世界中を転々とする様子がわかるマップが完成した。こうして、膨大な数の美術館やギャラリーとつながる主要なハブの存在が明らかになった。ネットワークのハブはどれも、非常に影響力の強い美術館やギャラリーだった。ニューヨーク近代美術館、グッゲンハイム美術館、ガゴシアン・ギャラリー。さらにペースギャラリー、メトロポリタン美術館、シカゴ美術館、ナショナル・ギャラリー・オブ・アートが続く。”

“実際、作品を見ただけで、その価値を見出したり評価したりできる者はいない。重要なのは、キュレーター、美術史家、ギャラリーのオーナー、美術商、エージェント、オークション会社、蒐集家たちの見えないネットワークである。美術館に収まる作品を決め、絵画に喜んで支払う額を決めるのも、その見えないネットワークだ。”

“ウォーホルは言った。アーティストとして成功するためには「作品をいいギャラリーに展示してもらわなければならない。」”です。すなわち、

“成功とは「個人的なものではなく集団的なものであり、あなたが属する社会の反応を必要とする」”です。

ワインの審査についても、えっと驚くような結論です。“「ワインが品評会で賞を獲得かどうかは、大きく運に左右される」という結論に達した”です。発端は、あるワイナリーのオーナーが自分の同じワインが品評会によって評価が大きくブレることを疑問に思ったことです。自分自身もいくつもの品評会で審査員をしています。そこでテイスティングの順番の中に同じワインを3回審査させました。同じワインですが3回とも評価はまちまちです。

結論は、もともと品評会に出品されるワインは最高級のワインで、ほとんど差異は無い、人間は瞬間的な感情で判断する性質があるために、同じワインでも評価がまちまちになってしまうということです。“研究者が「即時性バイアス」と呼ぶ心理的作用である。すなわち、人間は意思決定に際して、過去の感情よりもその場の感情に強く影響される。”とあります。その結果として、“品評会でゴールドメダルを獲得ことはほとんど運なのだ”です。

恐ろしいのは「即時性バイアス」は、音楽コンクールの演奏の順番、面接の順番が運命を決めるということです。最初の段階では審査員がまた自分の評価基準を固めてないので、比較的厳しい評価になり、その後に評価基準が見えてくると評価点が上がるというわけです。分析では5番目が有利とありました。

「人間は瞬間的な感情で判断する性質がある」は認識しておく必要があります。すべて緻密なデータ分析の結果です。そしてプレゼンテーションについては、“自分をプレゼンテーションするには、言葉以外の面がいかに重要かということである。パフォーマンスには上限があるのだから、自分が目立つような小さな方法を見つけ出して実行してみれば、大きな効果が望める。”とアドバイスしています。

この調子で他の法則も紹介していると切りがありませんから、後はご自身で読んでください。

著者は、しばしば理論物理学者であるアインシュタインと「成功の法則」の関連に言及していますが、“「成功の法則」と、気味悪く感じるほど一致している。まずは「成功で重要なのは、あなたではない。社会なのだ」とあります。

アインシュタインは、27歳の時に発表した相対性理論の論文で若くして著名な物理学者として認められていました。そのアインシュタインがニューヨークに来るということで、ワシントンポストの記者が出迎えに行ったところ、栈橋に数千人の群衆が集まっていたのを見て、アインシュタインはすごいと勘違いし、翌日の一面にアインシュタインのNY入りの記事とあの写真を掲載しました。実は数千人の群衆は、アインシュタインを出迎えに来たのではなく、ユダヤ人一行のリーダーであるシオニストを出迎えに来たのです。そして、ワシントンポストの一面の記事と写真は、アインシュタインを成功の軌道に乗せたわけです。成功は社会の反応を必要とする、の実例です。

「成功の第五の法則、不屈の精神があれば、成功はいつでもやってくる」においても、“アインシュタインが1935年に発表した論文は、その後数十年にわたって、大勢の物理学者が、年老いた天才の取りとめのない誤りだと一蹴していた。ところが1990年代に入り、その論文で言明された「もつれ」が量子力学の重要な特徴であることに物理学者たちが気づくと、状況は一変した。アインシュタインの論文は再評価され、現在では、その考えを基に量子コンピュータの研究が進んでいる。”

そして、この論文は、相対性理論の論文よりも多く引用されているとのこと。

もう人生の黄昏と思っている人も「成功の第五の法則」で鼓舞されて、成功を追求しましょう。ご一読を強くお勧めします。

◆雑感・私感◆

以上も雑感・私感ですが、出来る限り参照データを紹介しています。個人のブログは面白いですが、個人的な偏りがありますからできるだけメジャーなメディアを引用しています。

G7の崩壊は、欧米というスキームの崩壊でもあります。アメリカ、EU、ロシア、中国、新興国、そして日本が相互の利害関係でバランスをとっていき世界になったということでしょう。ただ、人類の将来、世界経済の発展に対する指導的なリーダーシップをとるスキームはありません。G7の中で日本は非常に微妙な立ち位置にあります。

気候温暖化とプラスチックゴミの海洋汚染については、G7で議論すべきだったと思います。子供や孫の世代から我々の世代は厳しく糾弾されることになるでしょう。スウェーデンの一少女の勇気ある行動が眩しいです。やはり若い世代は感受性が高いです。

韓国がGSOMIAの破棄を決めました。アメリカが事前に継続を求めていたにもかかわらず、大方の予想を裏切って破棄したわけです。アメリカ政府も強く反発しています。今や反日ヒステリーの状態ですから、文在寅政権は理性的な判断はできる状態がありません。が、この決定で韓国の反米的な姿勢がはっきりと見えました。と同時に、アメリカの韓国への影響力の陰りを見ました。ある意味、文在寅大統領にブレはありませんから、日韓の問題も文在寅大統領が変わらない限り解決されないでしょう。彼個人の北朝鮮への憧憬、南北統一という夢が、政権の行動を決めています。

心の底に眠っていた国民の感情を煽り立て政権の求心力にするという手法は、ヒトラーに相通じるものがあります。ヨーロッパで広がりつつあるポピュリズムも同様です。さすがに韓国有力紙は文在寅大統領のやり方に異議を表明するようになりました。日本は当分静観するしかありません。文在寅大統領の反日の扇動が、日本国内に嫌韓の空気を大きく広げてしまったことは、韓国の今後の負の遺産として残ることになります。加えて韓国の感受性の高い若い世代の心に、負の遺産を形成していきます。

当分、文在寅政権の言動を静観して、日本は動かずが、国民的な合意でしょう。

◆内容・記事に関するご意見・お問い合わせ/配信解除・メールアドレス変更は下記まで
webmaster@fukan.jp

◆俯瞰MAIL92号(2019年8月26日)
発行元：一般社団法人俯瞰工学研究所
発行人：松島克守

編集長：松島克守

配信人：石川公子

URL：<https://www.fukan.jp/>
